77 清洲橋

きよすばし

清洲橋のデザインは、第一橋梁の永代橋（No.63）とともに、そのデザインはなかなか決まらなかった。最終的に決まったのが、優美な懸垂曲線を描く現在のデザインである。

架橋地点は、「対岸の深川筋と浅野セメント会社又は多く倉庫が櫛比し至って静寂の地」である。「清洲橋には、……周囲の風光に調和し、又永代橋の拱橋には反対なる優味を有する吊橋を配するは、最も当を得たるものであろう」（『清洲橋設計計算書稿』復興局）。橋のデザインは、当時世界の美橋といわれたケルンの吊橋をモデルにしてつくられた。ただし、清洲橋の規模はケルンの吊橋より一廻り小さい。

永代橋は男性的に、清洲橋は女性的につくられたが、対比的な効果を狙って橋を配置するのであれば、永代橋と清洲橋の橋のタイプを逆にしたらどうなのだろうか。先の文献と対をなす『永代橋設計計算書稿』は、すでにそれについてふれている。「吊橋の如きは、形態佳麗なるも、其の美は繊細にして幾分女性的の感あるが故に、本地点の如き雄大なる環境中にありては圧倒さる傾きあるべし」。

美しい橋をつくるにはお金がかかると一概には言えないが、清洲橋は隅田川の橋のなかでは一番コストがかかっている。321.3万円。二番目が永代橋の292.4万円である。今日のお金に換算すると、安く見積ってもそれぞれ40億円、35億円ぐらいにはなる。ちなみに他の隅田川橋梁の建設費をリストアップしておこう。言問橋 238.3万円、駒形橋 190万円、蔵前橋 175.1万円、相生橋 150.7万円、吾妻橋 123万円、厩橋 113.4万円、両国橋 98.8万円。

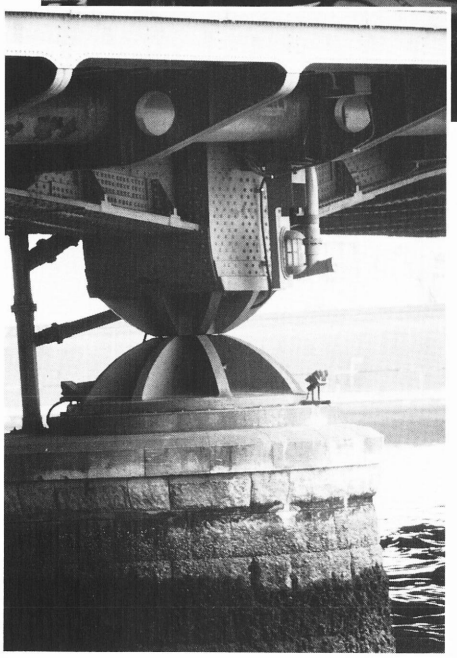
橋の幅員や基礎工事費が建設費の差になってあらわれたと考えられるが、清洲橋や永代橋のところは、とくに地盤が悪かった。清洲橋でも、ニューマチック・ケーソン工法が採用されている。また橋全体を優美に見せるため、当時海軍で試作研究していた高張力鋼を橋のチェーン部材に利用した。これによって材料の断面を小さくできるので、デザイン的にも好ましい結果が得られた。

震災前、清洲橋の地には橋がかかっていなかった。橋名は、深川の清澄町と日本橋中州町とを結ぶので、清洲橋と命名されたが、これは公募で決められたものである。戦前の土木・建築行政は、内務省を頂点にした上意下達の指揮系統でおこなわれ、住民の意向は斟酌されなかったと考えがちだが、そうでない面もあったようだ。

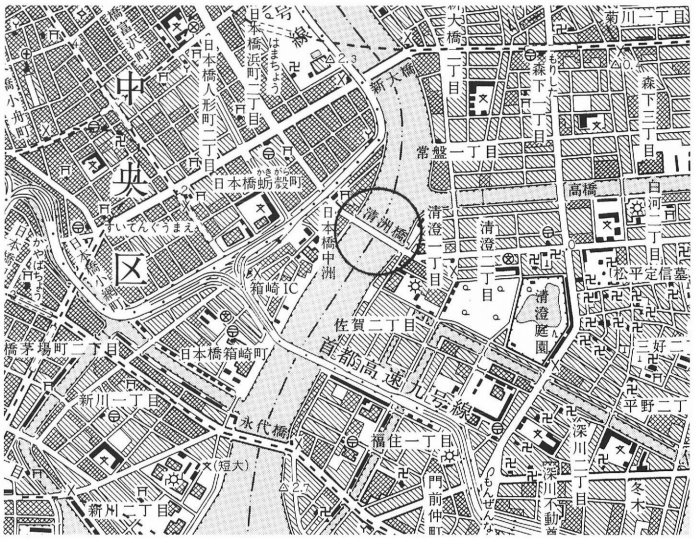
ケルンの吊橋には後日談が伝わる。ケルンの吊橋は、第二次世界大戦の末期に壊されてしまった。戦後、橋を復元するか否かで議論されたが、違うタイプの桁橋が架設された。しかし地元には、むかしの美しい橋を忘れられないという人がいて、なんとわざわざ清洲橋を見にきて、むかしの橋を偲んだという。〔ＩＴ〕

竣工年月：昭和３年（1928）３月
所在地：東京都中央区－江東区
河川名：隅田川
橋長・幅員：186.220ｍ×22.0ｍ（車道16.60ｍ＋歩道２×2.70ｍ）
径間数・支間長：１×45.720ｍ＋１×91.440ｍ＋１×45.720ｍ
形　式：自定式吊橋

〈1994年8月6日，撮影・共に伊東　孝〉



ヒンジ部。最近の吊橋はタワーが上から下まで1本でつながっているが，清洲橋ではタワーの部分がヒンジになっている。造形的にも美しい。



(1:25,000　東京首部)